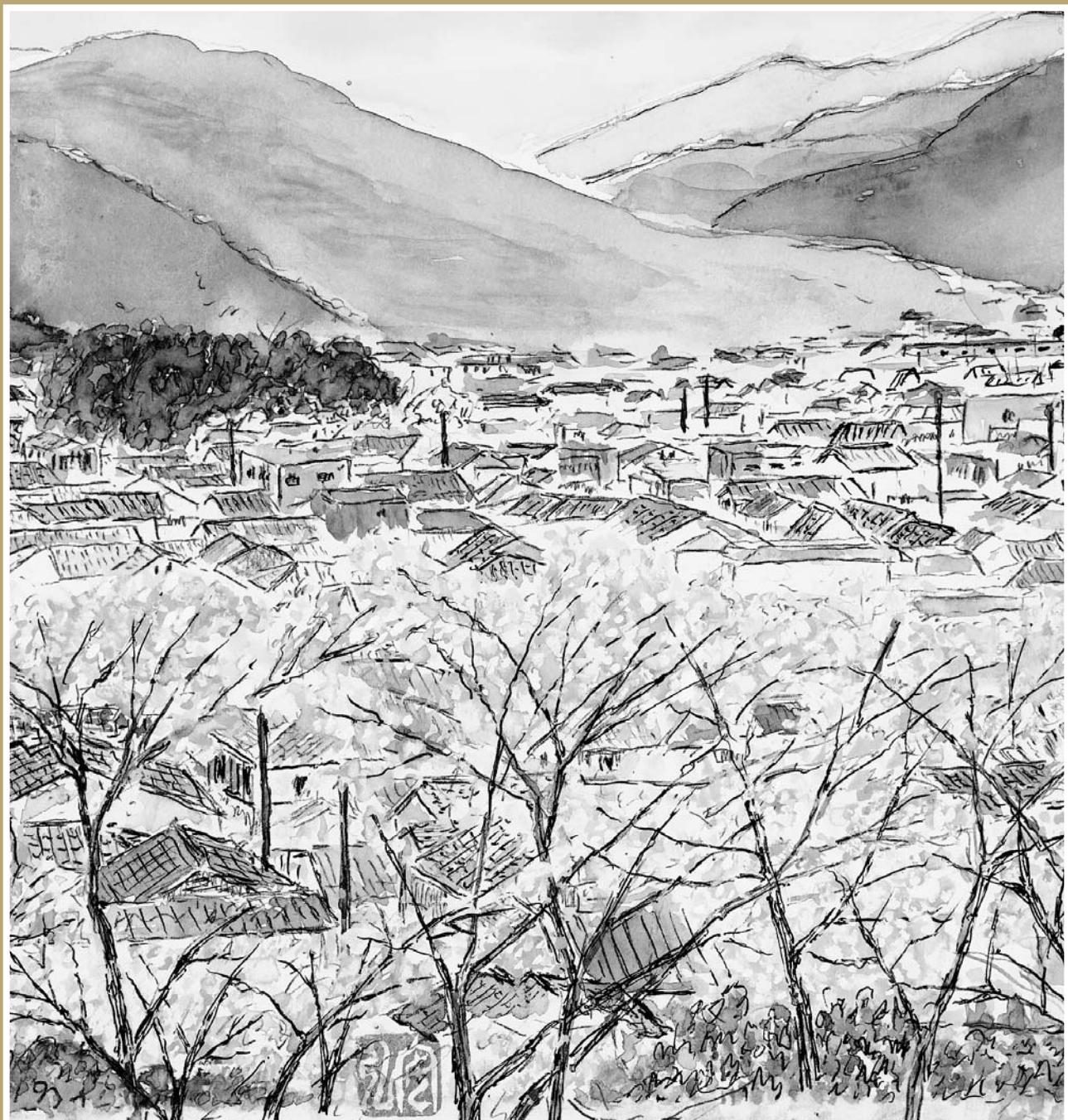
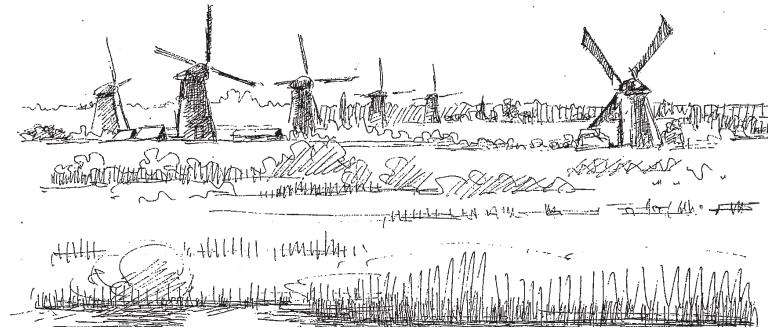


# やまさき文化

’10-3 \* No.29



穴粟市山崎文化協会



子供を育てることは協会の未来につながる

宍粟市山崎文化協会会長

福岡久藏

十一月三十日に文部科学省が発表した「問題行動調査」によると、全国の小、中、高校が二〇〇八年に確認した児童生徒の暴力行為は三年連続増の五万九、六一八件と、前年比で七、〇〇〇件近く増え、過去最多を更新しています。

文部科学省児童生徒課は「感情がうまく制御できない。コミュニケーション能力が不十分。といった小中学生が増えているのではないか。」といっています。

神奈川県教育委員会も同様の認識に立っていて「人間関係が薄い」「ストレスの増大」「規範意識が低い」という要因をあげています。ところが、こうした子供一人ひとりに向き合い、一緒に解決策を考える余裕は、今の学校にはない、増え続ける事務作業に教師が忙殺されているといわれています。

まだ家庭環境を見ても其働きで親子が接する時間が少なくなっています。一人親家庭も増加しています。今のように不況が続くと、収入の不安定も影響するでしょう。親に気持ちを十分受けとめてもらえないまま成長し、家庭でのストレスを引きずって学校にゆく児童生徒が増えています。

対策としては、教師や親以外の人が支援態勢を組み、学校の内外で子供に目を向けるようにすることが大切で、有り様も多様に考えなければならぬでしょう。

対策としては、教師や親以外の人が支援態勢を組み、学校の内外で子供に目を向けるようになることが大切で、有り様も多様に考えなければならぬでしょう。

文化協会では児童合唱団の参加があり、太鼓や民謡グループにも子供たちの参加が見られます。「わしらのグループは年寄りばかりじゃ」ではなく、工夫をして児童や生徒の参加が呼び込めないのでしょうか。

そうすることでも、少し淋しくなってきて、いる芸能祭やふれあい文化祭が脈  
やかになってくると思います。

郷土芸能継承活動などは無論ですが、文学関係や芸術文化活動や囲碁等にも参加が得られるようになれば文化協会の雰囲気も変わるでしょう。

◇ 目次 ◇

我が城下町 “やまさき” 今昔  
特別寄稿『戦いの記憶を歴史に刻

短歌

## 研修旅行の報告

## 自然保護 の思想

## 私の暮歴と暮の魅力

### ダムの心得

## 合唱団の思い出

## 児童合唱団の思い出

## 山崎美術協会の今昔

宝塚と日本舞踊

日本武道館への道

日記

## 合同研修旅行

## 盆踊りについて

## ターン・アートクラブの誕生

事務局たより

表紙画・カット

表紙題字

# 子供を育てることは協会の未来につながる

穴粟市山崎文化協会会长 福岡久藏

十一月三十日に文部科学省が発表した「問題行動調査」によると、全国の小、中、高校が二〇〇八年に確認した児童生徒の暴力行為は三年連続増の五万九、六一八件と、前年比で七、〇〇〇件近く増え、過去最多を更新しています。

文部科学省児童生徒課は「感情がうまく制御できない。コミュニケーション能力が不十分。といった小中学生が増えているのではないか。」といっています。

神奈川県教育委員会も同様の認識に立つていて「人間関係が薄い」「ストレスの増大」「規範意識が低い」という要因をあげています。

ところが、こうした子供一人ひとりに向かい合い、一緒に解決策を考える余裕は、今の学校にはない、増え続ける事務作業に教師が忙殺されているといわれています。

また、家庭環境を見ても共働きで親子が接する時間が少なく、家族揃って食卓を囲むことも少なくなっています。一人親家庭も増加しています。今のように不況が続くと、収入の不安定も影響するでしょう。親に気持ちを十分受けとめてもらえないまま成長し、家庭でのストレスを引きずつて学校にゆく児童生徒が増えています。

対策としては、教師や親以外の人々が支援態勢を組み、学校の内外で子供に目を向けるようになります。有り様も多様に考えなければならぬでしょう。

文化協会では児童合唱団の参加があり、太鼓や民謡グループにも子供たちの参加が見られます。「わしらのグループは年寄りばかりじゃ」ではなく、工夫をして児童や生徒の参加が呼び込めないものでどうか。

そうすることで、少し淋しくなってきて芸能祭やふれあい文化祭が賑やかになってくると思います。  
郷土芸能継承活動などは無論ですが、文学関係や芸術文化活動や囲碁等にも参加が得られるようになれば文化協会の雰囲気も変わるものでしょう。

荒木 野中 山崎 山口 宗平 井口 長田 小林 北山 塚田 稲澤 溝端 安裕 稲澤 明子 三井 一三 武二 吉司 榮子 章弘 俊介  
福岡 荒木 生田 鎌田 前野 福岡 清水 小野 藤村 田口 藤永 栗山 小田 藤間 博巳 真弓 幸正 祐子 正勝 達子 華葉 久藏 仁美  
久藏 裕明 安弘 俊介 良造 瑞巖 久藏 哲朗 實子 幸正 博巳 真弓 達子 華葉 久藏 仁美

# 我が城下町『やまさき』今昔

山崎文学会 荒木俊介

もう十数年前初めて小学校の同窓会を結成して案内状を発送したところ滋賀県に住む竹馬の友H君から早速電話が掛かってきた。

「おい、ええことやってくれたな。わしは、山崎が懐かしうて、早う帰りとうて帰りとうてな、この気持ちあんたらには分からんやろうな」

さすがに『お前ら』とはいわなかつたが、子供の頃の山崎弁丸出しである。

話している間はそれ程感じなかつたが、受話器をおいて改めて我々在郷者には

分からぬH君の切実な望郷の想いがじーんと伝わってきた。私達の様に長年故郷に居座つていると偶には少し違つた土地柄のところに住んでみたくなるものである。

だが、話は本題と少し逸れるが、「國破れて山河あり」の詩で有名な唐の詩人杜甫の場合は深刻であった。官吏であった杜甫は戦乱の祖国を逃れて望郷の想いに悩みながら諸国を放浪した。

晩年は揚子江上の舟住まい、洞庭湖畔の岳陽楼に登り、遙か帰るに帰れぬ祖国の空に涙しながら

老病、孤舟あり

とその詩の中で悲痛なまでの望郷の想いを嘆いている。

話は、本題に戻るが、カタルシスという西洋の言葉がある。その意味の領域は広いが、要するに悲劇をみて共感を覚え、心を癒す（美しくする）というような意味なのである。私がこれから語ろうとする『我が城下町やまさき今昔』も杜甫やH君らから受けるカタルシス風な心情を背景に成るべく事象を並べた編年譜的なものでなくロマン豊かな語りにしたいと願つてゐる。

今の山崎町をみて『城下町やまさき』といつてもそれを思わせるような風景は殆んどといってよい程見当たらない。今僅かに本多公園の正面入口の紙屋門くらいであろう。因みに紙屋門とは紙屋と称する商人の寄贈によるものといわれてゐる。

しかし私達が子供の頃はまだまだ多く残っていた。

小学校の建物が今的位置とは違つて紙屋門内の本丸と呼ばれる屋敷跡地にあつことは年配の方であればよく知つておられる。東南と東北の両隅にまだ瓦葺白壁造りの角櫓すみやぐらが建つていた。その頃既に瓦も欠け傷んで辺りは雑草が茂り、近づくことは禁じられていた。今になると残しておけば町の歴史の立派な証になつたのではないかと思うことがある。この東南の角櫓は新しく講堂を建てる時に取り壊されたと記憶している。

完成した講堂は天井も高く、総ガラス張りで全校生徒が一堂に入れる明るく近代的で大きなものであつた。だが、後ろの白壁には岩倉具視、西郷隆盛、伊藤博文、木戸孝充といった明治の元勲の大きな色彩肖像画がずらりと掲げられて明治の馨りを伝えていた。日清、日露の戦役に勝利し、東洋の盟主はおろか、世界の列強と肩を並べる程になつた頃のことである。

東北の角櫓の南隣には白壁造りの小さな蔵様の建物が三段ばかりの石段の上に厳しく建つていた。扉は同じく白壁の重々しい感じのもので鉄製の門に大きな鏡前が掛けられていた。奉安殿と称して天皇の御真影や教育勅語が奉安されているところであった。教育勅語は式日には必ず講堂に集まつた全校生徒の前で演壇に上がられた校長先生が朗読され、私たちは一斉に頭を垂れて聞き入つたものである。

私は嘗て偶然にも一度だけこの教育勅語を捧げ持つて奉安殿の前の石段を登つておられる人の姿を目にしたことがある。式の終わった後納められていたのである。後姿なのでそれが誰であつたか分からぬ。多分モーニング服姿であつたと思うのだが。白手袋であったことはだけは鮮明に記憶に残つてゐる。当時の教育の有様を表す象徴的な光景として今もよく覚えている。

東南と東北隅の角櫓の外に校舎の北側にだけ未だ内濠うちぼりが残つてゐた。今の図

書館と本多公園の間である。この内濠は校舎の西側にも「の字型に続いていた

のだが、私達の頃には既に埋め立てられたのだと聞かされていた。湿地帯の様になつて、雑草が生い茂り、とても近づくことは出来なかつた。現在の文化会館の駐車場辺りである。

この残つた北側の内濠は幅が七、八メートル程はあつたのではなかろうか、かなり広いもので、水量も結構豊富であった。だが放置されたままなので水は豊富なのだが、お世辞にも綺麗とはいえなかつた。周囲は水際まで水草が生い茂つていたが、東端のところだけは雑草もなく、小道があつて、水際まで近づくことが出来た。冬の寒い日などにはこの頃と違つて水際一面に氷が張るのである。

物珍しさもあつて生徒が近づくので、学校からは氷は薄く危険だから上に乗つてはいけないと注意されていた。注意をされると却つて不思議に行つて見たくなるもので、私は一度だけ氷の張つた寒い日の放課後その水際に行って見たことがある。氷はかなり広く張つていて水際近くは厚そうなので靴を踏み入れてみるとメリッという音がしたので慌てて足を引っ込んだ記憶がある。その頃は雪も多く、雪だるま作りや雪合戦などよくしたもので、晴天の日には寒風をついて凧揚げ、竹馬乗りなど戸外の遊びが多かつた。

城下町風情といえばこの本丸跡にあつた元小学校周辺だけでなく、現在の防災センター前を東西に走つてゐる鹿沢線にもまだまだ多く残つていた。というよりもむしろこの鹿沢線通りの方が城下町らしい風情をより多く残していた様に思う。だが、そうしたことを見ようと思うとどうしても昔の山崎藩の詳細な地図がなければ思うように筆が進まないのである。

そこで私は図書館で探してもらつたところ本稿の三頁に掲載した「天保山崎藩之図」という地図が出てきたのである。この地図を見ると細部までが詳細に記載されているので一見して昔の山崎藩の全容が目に見えるよう浮かんで来る所以である。こうした地図は郷土史などに关心のある方は早くからご存知であつたと思うが私は初めてで、恐らく町民の大半の人たちもご存知なかつたことと思う。そこでこの機会に一人でも多くの方に見て頂こうと思い、本誌に掲載す

ることにした。

私はこれを見て一番驚いたことは内濠といえば先述の通り元小学校の北側と西側だけのものくらいにしか思つていなかつたのだが、この地図によるとご覧の様に紙屋門前を巡つてコの字型になつて本丸を囲んでおり、更にその内濠の北側の中央から図書館つづいて小学校の運動場の北側を巡り、今の阿保歯科医院のところを新道路に沿つて南に下がつて、裏御門（現在「搦め手門跡」石碑の建つているところ）まで巡つてゐるという今まで考えていた陣屋程度の規模といったものより遥かに規模の大きなものであることが分かつた。私は驚くと共に誇りにも思い、同時に自分の無知を恥じたものである。

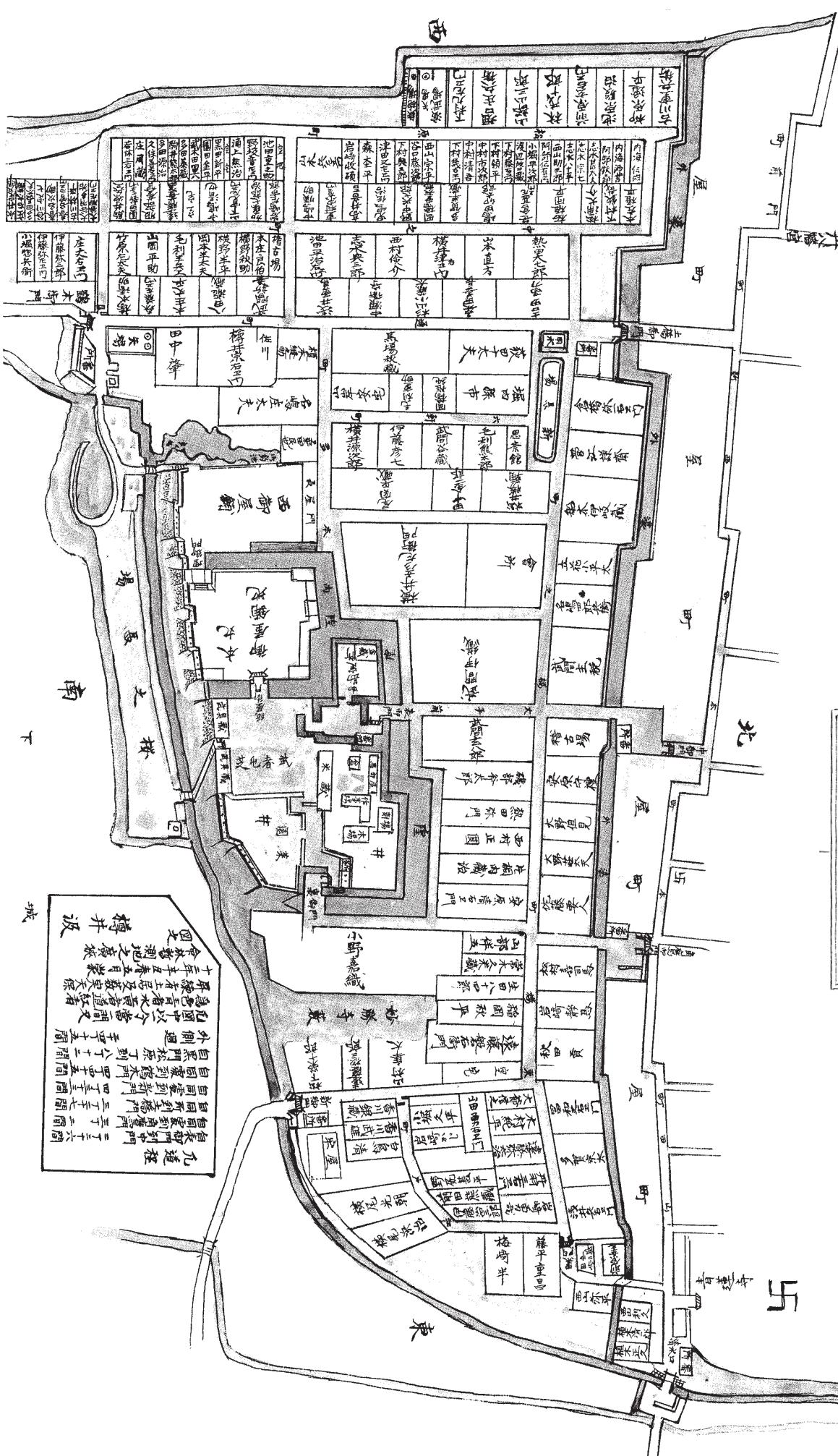
これでは立派な防備も備えた城郭である。そこで私はそうした時代の先達に敬意を表する思いで表題を「我がふるさと山崎今昔」から「我が城下町『やまとさき』今昔」に変えることにした。

この地図に見える東桜町通りといえば先述の防災センター前の通りのこと、私達が小学校に通つていた馴染み深い道である。しかしその頃は子供である。我々町屋育ちの者には厳めしい門構えの屋敷だなと思う程度で武家屋敷通りとしての風情など分かる筈もなかつた。今こうして「天保山崎藩之図」を眺めてみると子供の頃何気なく見過ごしていつた風景の中に城下町らしい風情が今更のように思い浮かんでくるのである。

町屋通りにあつた私の家の裏からこの東桜町通りへは幅一間半ばかりの可なり広い側道があつたので自由に行き来出来た。武家の時代には私の家の南側は画面で見られる様に外濠が巡らされていて武家屋敷通りであつた東桜町などは到底入れる世界ではなかつた。入るには各所にある御門の番所の許しがなければ入れなかつたのである。ところが、明治維新と同時にこの外濠は現在の様に幅半間程の溝に埋め立てられ、それを機に私の家から外濠一つ隔てて南側にあつた秋田貢家の好意によりその敷地の西側に幅一間半ばかりの側道が造られて近所の者がこの側道を通つて自由に東桜町通りと行き来出来るようになつたのである。

この外濠については子供の頃から幅半間ばかりの狭い溝しか知らない私には

國之藩崎山保天



俄かに想像できないのだが、同じ山田町の旧家の奥さんから家の祖父の伝え話として昔はこの外濠で夏は泳いでいたということを聞かされたことがあった。

失礼なようだが、その時私は内心まさかと思った。というのは濠といえば直ぐ小学校の北側にあつた水草の浮いた内濠が連想されたからである。

ところがこの「天保山崎藩之図」をよく見るとこの外濠は西の方で菅野川と連なっている様に見えるので町史に詳しい横井先生にお伺いしたところ水位の関係でそれは無理で、背後の山裾の水を集めて引き入れていたものと思われるとのことであった。昔のことだから季節によっては可成りの水量があったものと想像されて改めてさきほどの奥さんの話は本当であつたのだと納得することが出来た。又その後濠幅の広かつた西町辺りでは小舟による一寸した舟運の話も耳にした。勿論武家時代にはとても許されることではなく、恐らく明治維新から外濠埋立て迄の間のことであろう。

この東桜町通りは山崎町特有の北から南に向かって僅かではあるが低地化しているため道の北側の土地は一間ばかり高く、側面はずらりと石垣が組まれていた。だから北側の武家屋敷は総て石垣の上に迫り出したように冠木門と堀が建てられ、その門の下を石段が潜る様に造られていて何となく窮屈な感じであった。その点南側の屋敷は冠木門の前にも広い石畳があり門を潜った奥にも長い石畳が玄関前まで続いていて、武家屋敷らしい風格が感じられた。ところが皮肉なことに北側に比べ南側には、不思議と原型のままの武家屋敷らしいものはあまり残っていないかった。ただ幸いにも私の家から例の側道を通って出た真正面に外見上は略完全な姿の武家屋敷が残っていた。他には冠木門といつたものは全く残っておらず、所々に白壁塀が散見されるといった程度であった。

この武家屋敷は冠木門から玄関に至る石畠は昔のままで雑草も余り見られず昔の威容をそのまま伝えていた。だが、一步裏庭の方に廻ると無住のまま長い間放置されたこともあって雑草は私たち子供の丈程にも生い茂り、とても足を踏み入れることなどは出来なかつた。

私たちは、此処を氣味悪がつてお化け屋敷と呼んでいた。母親からもあの屋

敷には古井戸などもあつて危険だから中に入つてはいけないと注意されていた。この屋敷の東側は空き地で畠屋の藁倉庫などもあり隠れん坊などをして遊ぶのには絶好の場所であつたが、流石にこの屋敷だけは誰も近づく者はいなかつた。

或る時好奇心から一度は中を覗き見たいと思つていた私は、或る日遊び相手も無く所在ないうまにその屋敷の中に恐る恐る入つて見たことがある。もう遠い昔のことなので裏口から入つただけは憶えているが途中の屋敷の構造などは薄暗かったことでもあってよく憶えていない。少し進むとやや明るくなつた

と思って更に進むと次第に目の前に柱と床板だけで簡抜けの状態になつた屋敷内の全容が現れてきた。障子も襖も無いため外部からの光線で今まで手探りのように通ってきたところと一変して明るくなつて行った。床板は大方がはぐれ、毀れて骨組みだけになつた襖や障子が所々に散乱している光景は鳥肌が立つ思いでもう少し屋敷に上がつて見たいという好奇心は湧くのだが、恐ろしい思ひの方が強く、何かが後ろから従いてきているのではないかといった恐怖心に駆られながら急いで出て行つた。その時の荒れ果てた廃屋の光景は今も忘れられない。

こうした武家屋敷ではあつたが、たつた一つ救われるものがあつた。それは初秋の頃になるとところどころ崩れ始めた白壁塀の奥から木屋の爽やかな香りが漂つて来ることであつた。木屋の香りといえばこの屋敷だけではなかつた。



るのは車の排気ガスばかりである。

この通りで他に武士の時代の名残を留めるものがもう一つあつた。それはこの図面の大手前とある通りと桜之町の交わる東北角にある安原守禮家の玄関の天井に白木ではあつたが精巧な作りの駕籠が吊るしてあつた。この屋敷の冠木門は既に無く、一間ばかりの高さの石垣だけが残っていた。学校の帰りなどに物珍しげにそっと石段を上がつて覗き見たものである。

話は違うがこれと同じような光景が舟運で栄えた出石の舟問屋安原家の玄関でも見られた。町人でも駕籠が許される程だから出石でも指折りの舟問屋であったに違いない。しかし、流石に武家の安原家のものと比べると作りは簡素で階級を重んじる時代をよく現していた。更に格上になるとテレビなどでもよく見られる白木ではなく漆細工で華麗な装飾を施したものになるのである。

乗り物の話といえば私の遊び場であつた東桜町の秋田家の東隣りの富和家の畠地南西隅に車輪もない馬車の残骸が物置小屋のようにして長らくあつた記憶がある。この山間の地にも馬車の時代があつたのかなと半信半疑でいたのだが、この稿を書くにあたつて運輸の歴史を調べてみると教育委員会編集の『山崎町史』の中に明治の頃一時期山崎を中心には各地に馬車が通っていたことが記載されていた。恐らくその頃のものだと思う。明治の頃のことだから富裕層の者でなければ乗れなかつたに違いない。それまでは誰も何処に行くにも全て徒歩であった。私の家の創業者である祖父なども大八車を引いて姫路まで商品の仕入れに出かけ、その日は商品を仕入れた問屋に一泊させてもらい、翌日満載の車を引いて石倉の坂や須賀の峠を超えて帰ってきたのである。私の祖父だけではない、当時の商人は皆そうであった。

ただ川を上下する高瀬舟の舟運だけは早くからあつた様である。明石女子師範に入っていた私の母などは出石の発着場から高瀬舟で山陽本線の網干駅の近くまで下り、そこから明石まで汽車で行つたという話をよくしていた。人だけではなく、炭といった山間地の特産品などの積み出しにも盛んに利用されていました。馬車と同じ頃登場したのが荷馬車である。かなり長い車体の四隅に鉄の輪を

はめた木製の車輪をつけて馬に引かせるのである。当時は舗装もない凸凹道なので大きな音を立てて通っていた。それだけではない。馬は処かまわず歩きながらでも糞を落として行くのである。冬の日などには落とした糞から湯気が立ち登っている光景をよく見掛けたものである。

商家では店の前の牛馬の糞は見つけると直ぐ拾い集めるのが日課の一つであった。

馬車のことから話は逸れたが、馬車の廃車のおいてあつた富和家の隣の多賀家も略武家屋敷の面影を残していた。勿論北側だから一間ばかりの高さの石垣の上にあって堀と冠木門が石垣の前面に迫り出し、石段が冠木門の下を潜るよう奥につづいていた。この屋敷はご家族が早くから都会に出られて貸し屋敷にされていた。

この屋敷に住んでおられたのが当時小学校の校長で長沢というご家族で、その真前に篠陽塾という若い女子に裁縫、お茶などを教える塾があつた。ガラス張り二階建ての寄宿舎もある立派な塾で、経営者は前川といい、主人は小学校の校長さんで奥さんが塾を経営されていた。その塾に向かいの長沢校長の奥さんが教師として通つておられ、辺り一帯が遊び場であった私は当時珍しい袴姿の女性が冠木門の下の石段を降りて前の塾に通つておられる姿をよく見掛けたものである。その後、両家族とも都会に出て行かれ、北側には冠木門のある武家屋敷、南側にはガラス張りの二階建の建物といった昭和初期の時代の移り変わりを象徴するような風景は暫らく残つていたが、何時ともなく壊され、今は鹿沢線の延長などで風景はすっかり変ってしまった。

昔の風景といえば私にとつてもっと残念というよりも心痛む思いのする風景がある。藩の地図の右下隅に見える小川に掛かった小さな石橋の辺りの風景である。今思い起こすその風景はゴッホの名画「吊り橋のある風景」にみられるような長閑な田園風景であった。

しかし、それは今思い起こす感慨である。その頃はただ無心に友達と共に小魚取りに泳ぎに遊び戯れた。小川の水は豊かで川底の小石が輝いて見える程麗であった。春になると黄色いタンポポが畦道を彩り、初夏の夕暮れ時ともな

る。あの甘酸っぱい味は今も忘れられない。

岸花が咲き乱れた。  
ると川辺の石垣の草叢に虫が群れ飛び交い、夏も去り、初秋の頃になると彼

この石橋を地図の中に見つけた時の感動は言葉では言い現せない。私の子供の頃は石橋であったが、武家のころは土橋であったかもしれない。いずれにしてもその頃の子供たちもこの絶好の遊び場で日暮れも忘れて遊び戯れたに違いない。

だが、その風景も今はジャスコの建設で跡形もなく消えて、その面影を偲ぶ縁は何處にも見当たらない。

この小川に沿った畦道は東に向かって揖保川でも絶好の釣り場である野村井とよばれる井堰に行く道でもあって、思い出も多い。石橋を過ぎて東に向かうと今のが十九号線につき当たり、横断すると直ぐ稻垣神社の森がある。子供の頃にはよく肝試しに使われていた森で、祠の軒周りには願掛けであろう女性の長い黒髪が根元を白紙で包んで吊るしてあった。子供心にも余り気持ちの良いものではなかった。釣りに夢中になつて夕暮れの帰り道など森の奥の祠の前に来ると気味悪く走る様にして通り抜けたものである。この森を過ぎて少し行った処にも小川があつて石橋が掛かっている。ここが山崎でも有名な“夜鳴き石”発祥の地ともいわれている（諸説あり）。天保の頃赤穂藩のさる武家の娘が親の意にそわぬ男と別れるために山崎藩の武家に行儀見習いとして預けたところ美貌が禍としてか藩重役の子息から言い寄られ、断り続けている中にこの石橋の上で斬殺されたとのである。ところが、その日から夜な夜な赤穂に帰りたい——という女の泣き声が聞こえるという噂が立つた。哀れに思つた村人は相談の末その石橋の血の滲んだ石を懇ろに弔つて上寺の妙勝寺の境内に安置したところその泣き声は止んだとのである。その石は今も妙勝寺に現存している。今であれば、三面記事で済んでしまうところだが、昔の村人達の人情の深さを偲ばせる出来事である。

この石橋から揖保川までの北側の田圃は殆んどが桑畠であった。釣りに夢中になつての帰り道よくこの桑畠に忍び込んで紫色に熟れた実を食べたものであ

釣りは野村井であったが夏の泳ぎはなんといつても唄にも出てくる揖保川の十二波の瀬である。十二、三の腕白盛り、十二波の急流を飛沫を浴びて下る快感は子供心にはたまらない。急流を下りきった傍らには淀んだ深みがあって、その淀みに寄り添うように高さ三米ばかりの男岩と呼ばれる岩が立っている。急流下りを楽しんだ後はこの男岩のてっぺんから飛び降りるのだ。子供の頃は結構高く見えて飛び降りるのに勇気がいった。

こうして泳ぎに夢中になっていると、時折

「おーい、筏がくるぞー」

という大人の声が何処からともなく聞こえてくる。すると我々は急いで岸に上がる。知らずに泳いでいて巻き込まれると大変である。岸に上がつても暫らくは川上の筏は岩に隠れて見えない。その中に男岩の陰からいきなり急流の中を飛沫を浴びながら現れて來るのである。先頭の筏に斜めに立てられた舵棒を飛沫を浴びながら操る船頭は勿論、後方で前後しながら棹を操っている船頭の形相は必死である。若し岩に当たつて筏が撲ると一大事だからである。我々はこの様子を固唾を呑んで見守つたものである。

泳ぎ疲れて川岸を去るとき貸しボート屋の傍らで自転車に氷と書かれたのぼりを立てたアイスキャンデー屋が金のない私たちは恨めしかつた。

揖保川への行き帰りの道端で今も忘れられない風景が一つある。それは川の近くに松田という炭団を作つておられる家があつて黒く丸められた炭団が道端の空き地に敷かれた筵に規則正しく並べられて夏の天日に干されていたものである。俳句にも出てきそうな一昔前の夏の風物詩として思い出される。炭団といつても今の若い人たちには馴染みはないと思うが、昔は炭団を使つた炬燵で冬の夜の床を暖めたものである。弁当箱より少し大きめの瀬戸物に灰を敷きそこに火をつけた炭団を埋め、それを木製の小さなやぐらの中に入れて布団の足元に置くのである。

日曜日の朝などは休みだと思うと楽しくて却つて早く目が覚める。すると弟寄つて布団の上であはれるのである。子供のことだから見境がなくその炬燵

に足が掛かって、その途端炬燵の灰が布団の上に飛び散って祖母や母から大目玉である。さすがに父は何もいわなかつた。しかし今思うと叱つた祖母や母たちも心の奥では健やかな孫たちの成長を喜んでいたに違ひない。

日曜日といえば紙芝居が楽しみの一つかつた。近くの総道神社の境内が格好の場所で、紙芝居屋のおじさんが自転車を止めてから拍子木で近くを廻つて知らせに来る。「黄金バット」「怪人二十面相」など「果たして運命や如何に」と話を巧みに次に繋いでいく紙芝居屋のおじさん。走馬灯のように浮かんでは消えてゆく懐かしい思い出の一齣である。

川泳ぎから帰る道はいろいろあつたが、地蔵堂のあるころも坂を通ることがよくあつた。その地蔵堂に立ち寄ると上川の畔<sup>うえかわ</sup>ということも高い崖の日陰ということもあって意外に涼しいのである。この上川が南に流れて青蓮寺東側崖下を経て新御門あたり西に向かい鶴木御門へと流れ、「天保山崎藩之図」を見れば分かるように丁度城郭の南側の外濠の形になつてゐるのである。

このころも坂を上がり切ると昔の歓楽街であつた今の鴻の町に出る。昔はこの辺りを地獄谷と呼んでいた。一日の稼ぎを一夜で失うところから誰いうともその名がついたものらしい。地元の者同志で話し合うときは笑い話で済ませてしまうのだが、他地域の者からいわれると余りいい気はしない。歓楽街も健全に発達すれば立派な庶民文化である。同じ擬名を付けるなら上方風に何々小路とか演歌に出てくる法善寺横丁といった様な粹な名前がつけられなかつたものかと思うことがある。

ところが、この間N H Kの「世界ふれあい街歩き」という番組を見ているとデンマークの首都コペンハーゲンが出てきた。ここは私も嘗て四、五日滞在したことのある街で水路の多い美しい歴史のある街で、街外れにはシェクスピアのハムレット縁<sup>ゆかり</sup>の古城があるので有名である。懐かしい思いでテレビを見ている中に「廁通り」という名前が出てきたのである。リポーターも直ぐ奇異に感じたらしく早速現地に赴いてその謂われを尋ねたら想像通り昔この土地は糞尿を集積処理する処からこの名前が今に残っているのだという。こうしてみると古い歴史の落とし子というものは何處にでもあるようである。

この地獄谷を西に向かって小路を少し進むと右側に映画館「新富座」があつた。前面はコンクリートの広場で二階建てであつた。二階の前面は総ガラス張りで創建当時から大正ロマン漂う瀟洒な建物であつた。しかし中に入るとまだ古風で先ず下足番に履物と番号のついた木札を交換してもらう。一階でも二階でも自由だが、畳敷きの升席で座布団は有料であった。小学生の頃は出入り禁止で許可の出た映画とか盆、正月などは入場が許された。

当時の映画は弁士や楽団による無声映画でフィルム切れや映写機の故障などで劇場内が真っ暗になることがしばしばであった。

それから暫らくして現れたのがトーキーである。確か初めて見たのが大河内伝次郎の「忠臣蔵」であった様に記憶している。映像がものをいう不思議さ、人の声だけでなく、内蔵助が覗箱の蓋を開けるコトリという音まで聞こえるのである。誰もが驚き感動し、しばらくは町中がこの話題でもちきりであつた。

劇場は「新富座」から少し西に行つた処に「旭座」というのが最上山の東側山裾に寄り添うように建つてゐた。

この劇場は、稀に上方の歌舞伎が上演されるということもあつたが、殆んどが旅回りの芝居で余り我々には縁がなかつたが、小学校六年の時或る一座の女の子<sup>たまたま</sup>が偶々私達の学級に編入されてきたことがある。舞台化粧を洗い落としたような色白の女の子であつた。

歓楽街といえば、趣は少し違うが、小料理屋などもあって静かで粹な名残を今も留めている小路がある。現在の樽岡写真館前の通り。この通りの南側に芸者を差配する「置屋」があつた。町屋には珍しい程間口の広い格子戸張



りの大きな屋敷で今もその儘残っている。だから昔はこの辺りを歩いていると

厚化粧に着飾った芸者が道具箱を持った男衆を供に歩く姿によく出会つたり、

ふとした家の前に差し掛かると簾越しに稽古であろう、三味線の音や時折は粹な女性の端唄の声も聞かれたものである。

この辺りの少し南西よりのところ、今のがしや薬局の西側筋向い辺りに道路に面して玉突屋があつた。今でいうビリヤードである。その前を通るといつもゲームをカウントする長く尾を引いた女性の声が流れていた。その隣りに私の家にも仕事の関係でよく出入りしていた音楽好きの若衆がいて楽団を結成して、演奏会を催したり、祭などの賑わしに出たりして楽しんでいた。まだ軍国調も見られぬ古き良き時代の風景である。

揖保川での泳ぎや釣りは大きくなるにつれ次第に疎遠になつていったが、気分転換のための散策や健康のための山登りといった生活に密着した点で山への親しみは却つて深まって行つたようである。

散策といえば、何といつても車や人通りの多い町外れより最上山公園から鐘撞堂、展望台、千畳敷、紅葉山といった最上山の山裾辺りの静かな小道が絶好のコースである。空氣もきれいで眺めもよいし、気が向けば一本松まで足を延ばして浩然の気を養うことができる。

この山裾辺りの小道のことを伊藤親保さんが京都の“哲学の小道”に肖つて同名で呼んでおられた記憶がある。伊藤親保さんは文学には大変理解のある方で、文芸誌創設の補助金を当時当選されたばかりの谷口元町長に掛け合われたところ各部門毎の要求では煩わしいからということで文化協会の予算として百万円を計上して頂いた。これが助成金百万円計上の経緯である。前後して名前も連盟から協会と改称され、その際協会の文芸誌的な機関誌として誕生したのが現在の「やまさき文化」である。この一連の実務を進められたのが俳人和田疎人さんであった。自らも文学会の一員として奔走された。その際私も疎人さんに誘われて同人に加わった。疎人さんは私の父の代からの知り合いで、その作品を通じて深く尊敬していた。作品にはロマンがあり、叙情豊

かである。人柄であろう。最上山公園の片隅に句碑がある。

### 草笛や夕靄

#### まちの灯を包む

この句は疎人さんの作品の中で最も優れた句の一つだと思っている。この句碑は伊藤親保さんら仲間の手で建立されたものだが、その伊藤親保さんがこの辺りの小道を“哲学の小道”といわれたのはその頃のことであろう。どの辺りの小道を指しておられたのか、今はもう故人となられて聞く由もない。

私はこの辺りの散歩の途中必ずといっていい程御堂前にある鐘撞堂の傍らのベンチに腰を下ろす。視界が広く眺めが素晴らしい。これ程眺望の効く丘のある町はそう滅多にあるものではない。私は以前龍野の鶏籠山の頂上に登ったことがあるが、視界が狭く、期待外れの気持ちで下りた記憶がある。

ただ眺めがよいだけではない。私は嘗て「最上山のベンチに腰を下ろすと昔が帰つてくる」という詩を書いたことがある。樹間を散歩した後このベンチに腰をおろすと様々な思い出が蘇ってきて、疲れを癒すだけでなく心も癒してくれるのである。

それではこれからこの鐘撞堂の傍らのベンチに腰をおろして過ぎ去つた日々を追憶しながら暫く我が故郷山崎の町を目を東から西に向けて眺めてみることにしよう。

眼下に広がる城下平野の東の端には山裾を縫うように揖保川が流れている。その少し手前、町の東外れには昔郡是の大きな製糸工場があつた。高い煙突が町のシンボルの様に立っていて、初めの頃は時を告げる汽笛が白い蒸氣を吹き上げたかと思うと暫らくしてボーッという音が伝わってきた。それが何時しか電気のサイレンに変わった。時代の流れであろう。

町の中央部に目を向けると、今は鉄筋五階建ての西信本店があるが、以前そこには平屋建て洋館の警察署が厳めしく建っていた。昔自転車の灯りは乾電池による灯りもなく、カンテラと称するブリキ製の筒状で前面が観音開きになつたものに蠟燭を点してハンドルの前に立てたものであつた。若し運悪く無灯火で見つかつた時は署で始末書を書かされて厳しく叱りをうけたものである。

その警察署から十米程西の四辻の東南隅一帯は修理工場も備えた神姫バスの停留所で此処が山崎町の玄関口でもあった。宍粟郡交通の要であり、その頃がさつき通り商店街の全盛期で乗降客や買い物客で通りは活気に溢れていた。

この商店街を更に西に向かい、視線をこのベンチの崖下に移すとそこには最上山公園が目に入る。此処にはもと公会堂と称する今でいう公民館が建っていた。畠百畠敷きといわれるほどの当時としては大きな建物であったが、戦後間もなく失火により消失し、現在は最上山公園として再生している。この公園のもう一段崖下山裾寄りに戎神社が祀られている。正月九日、十日の宵宮、本宮は縁起ものの笹売り、くじ引き、餅つきと西の八幡神社に劣らぬ程の寒さも忘れる賑わいが今も続いている。戎神社から少し南西に目を移すと元の町役場の跡地がある。今のしずの屋さんの真前である。現在は駐車場と菅山振興会館になっているが、昔は此処が政治の中心地で当時の町長は今の様に民意による直接選挙ではなく町議会によって選ばれていた。

此処から更に目を南に移すと一際大きく視界に入つてするのが小学校の校庭と校舎である。丁度腰を下ろしているベンチから見下ろして真南である。校庭を走り回る子供の姿が手に取るように見える。この辺り一帯が我が山崎藩の本丸を中心とした城郭跡なのだ。すると先に話したあの「天保山崎藩之図」が浮かんで来て子供の姿までが侍の姿に見えて來るのである。

幅四間ばかりの水をたたえた内濠が本丸から勘定所と表御門前を経て東南隅の裏御門まで巡つていて、その外側に武家屋敷が並び、更にその外側を外濠が巡つて町屋と隔てている。これらの城郭内や武家屋敷通りを想像していると、それぞれ往々来する侍たちの姿までが浮かんできて突然タイムスリップしたような錯覚に襲われる。しかし、現実に返つて考えてみるとその頃はこのベンチなどは勿論、恐らくこの最上山に登ることすら許されていなかつたのではないかろうか、城郭内が丸見えだからである。

さて話は愈々終章に近づいて來たが、現実に返つて改めて眼下の景色に目を移すと町の全容は時の流れと共にすっかり変わってしまったという思いである。町中の様相の変り方は生活の変化と共に仕方がない面もあるし、中には例えば

馬糞や砂埃のたつ路面が舗装されて良くなっていることもある。だが、残念なのは城下平野から昔の田園風な面影がすっかり消えてしまったことである。

昔は家などは殆ど無い一面の青々とした田んぼの広がる平野であった。だが今見る城下平野は道路が縦横に走り、家が密集した殺風景な景色に変容してしまっている。あの青々とした田の広がる田園風景は何処に消えてしまったのかと嘆きたくなる。山の美しさも大切だが、清らかな小川の流れ、蝶が飛び交い、四季折々の野花が咲き乱れる畦道といった素朴で長閑な田園風景も又掛け替えのない自然の宝である。こうした野の美しさも次第に消えて行こうとしているだけに文明の進歩による歪などと諦めず大切に守り、育てて行きたいものである。

人間の心は環境に左右され易い。山崎は災害も少なく美しい自然にも恵まれた町である。この山間の美しい自然を守りながら城下町“やまさき”を人情味豊かで文化の香り高い町に育て行きたいものである。

〔附記〕三頁に掲載の「天保山崎藩之図」に記載されている武家の名前の中、一部明治初期の名前の中もありますが、全容については正確であります。



## 『戦いの記憶を歴史に刻むこと』

ジャーナリスト 野 中 章 弘

(安富町安志出身)

郷里へ帰るたび、父祖の墓へ足を運ぶ。先祖代々の墓所は安富町安志の法性寺という小さな寺のそばにある。

祖先の墓といつても、私の記憶にある故人は、心臓病を患い幼くして逝った弟と先年相次いで亡くなつた両親のみで、残りの十幾つかの墓碑はいittai誰のものなのか、私にはわからない。

ただ、いつも必ず手を合わせる墓もある。祖父にあたる「野中昂」の墓石である。碑文によれば、昂は鳥取連隊の陸軍上等兵として中国戦線に派遣され、一九三八年（昭和十三年）十一月、戦病死していた。享年二十五歳だった。

生前、母は折に触れ、兵士として命を散らした祖父のことを口にしたものである。そんなとき、話はいつも「若くして死地に赴き、無念やつたろうなあ」という母の小さなため息とともに終わっていたものである。

母は血縁関係のある中川家から、野中家へ養女として迎えられた。野中家の跡継ぎである昂はまだ結婚もしておらず、万が一戦死した場合、家が途絶えてしまう怖れがあつたためである。当時、母は山崎高等女学校（山崎高校の前身）の生徒で、昂とは年齢も十歳ほどしか離れていた。

体格に恵まれていた昂は、上郡農業学校を卒業後、甲種合格で入隊している。ただ、入隊の正確な年月日は定かではない。一九三七年七月、除隊するという知らせを受け、伯父が神戸の港まで迎えに行つたが、昂は帰国船には乗つていなかつた。後でわかつたことだが、除隊となる日の夜中、非常招集ラッパが鳴つた。盧溝橋事件の勃発である。昂の除隊は取り消され、ふたたび中国の戦場に戻された。故郷へ帰れると喜んでいた昂は、がっくりと落胆したという。

その後、河北省の戦闘で負傷した昂は、病を得たこともあり、鳥取の陸軍病院へ後送され、そこで亡くなつた。伯父が見舞いに行くと、髪の毛もぐちゃぐ

ちゃでボロボロの姿のまま、ベッドに横たわっていた。見る影もないほどやせ細つていた昂は、「ほんまにえらい目におうたんやあ」とだけ言い残して、息を引き取つたという。

祖父だけでなく、父方の二人の兄もやはり中国で戦つており、長兄は生き延びたものの、敗戦と同時にシベリヤの収容所へ送られ、次兄は山西省で戦死している。

一方、私は取材で十数回中国を訪れており、日本の侵略戦争で被害を受けた中国人の話を耳にしていた。日本軍が住民虐殺を行つた平頂山（中国東北部）事件（一九三二年）の現場を訪ね、生存者の聞き取り調査をしたこともある。約三千人の住民が皆殺しにされたと言われ、今でも犠牲者の骨が散らばる現場は保存されている。赤ん坊や子どもの骨もあり、その寒々とした、荒涼たる光景を忘ることはできない。また、南京虐殺の現場もたびたび訪れ、生存者たちの証言を記録した。取材中、現地の人びとから「日本小鬼」と憎しみを込めて罵られた日本兵の中に、祖父や伯父たちもいたかもしれない、と思うと心はざわざわと波立つのである。

私はこの三十年間、アジアの戦争、紛争地の現場を歩いてきた。戦争の酷さは承知している。それでも日本が引き起こした日中戦争、アジア太平洋戦争の取材はいつもと違う緊張感を伴う。自分の肉親が殺戮の当事者だった現場では、事実を直視する勇気が必要だった。

昨年の十二月初旬、私がキャスターを担当するテレビ番組で、南京虐殺を扱つたドキュメンタリー映画「南京・引き裂かれた記憶」の武田倫和監督を招いた。この映画は、七人の中國人生存者たちと六人の元日本兵の証言で構成されている。武田の祖父もまた中國大陸で戦つた日本軍の一兵士であり、その事実が彼を映画制作へと駆り立てていた。



北京郊外の盧溝橋

「普段は穏やかな人柄の祖父も酒を飲むと大暴れしました。『中国人の亡靈が自分を襲ってくる』という意味の言葉を叫んでいたそうです」

武田は被害者、加害者の体験を自分の祖父の記憶とダブらせて聞いていたのだという。

友人のNHKプロデューサー、塩田純も似たような感慨を語ってくれたのを覚えている。彼は戦争の歴史を掘り起こすドキュメンタリーで、数々の賞を受賞したもっとも優れた制作者のひとりである。「日中戦争／なぜ戦争は拡大したのか」というNHKスペシャル（〇七年放送）では、上海戦、南京攻撃に参加した日本兵たちの証言を織り込み、破滅的な戦争への道を突き進んだ日本の姿を丹念に描いていた。金沢の第九師団の兵士の手記やその足跡をたどることで、南京で行われた捕虜の大量処刑など、南京虐殺に関わる証言もそのまま収録されている。

その番組の制作中、塩田の頭にはいつも中国戦線で戦った元日本兵の父親の姿があった。それまで父親は戦争の体験を何もしやべったことはない。

塩田の番組を見た父親は、ただ一言「よく出来ていたね」とだけ感想を述べたという。

武田の祖父も塩田の父も、多くの元日本兵たちは、戦後、自身の戦争体験を黙して語らない。記憶は心の奥底に封印された今まである。

三月中旬、十数名の学生たちを連れて北京へ研修旅行に行く予定である。そのとき、祖父の昂が戻った河北省へも足を延ばす。日本軍による被害の実態を調べるために。高齢ながら、その当時のこととを証言してくれる老人も存命なのだという。



南京虐殺の生存者（右）

母が語ってくれた「ほんまにえらい目におうたんやあ」という昂の最後の言葉は、私の耳にこびりついている。二十そこそこで戦地へ駆り出され、死を強制された青年の無念の思い、魂の慟哭を、昂の言葉から感じて、私は胸が詰まる。もっと生きたかったにちがいない。

戦争の体験者は次々と世を去っていく。被害者であれ、加害者であれ、当事者の肉声を記録できる時間はもうほとんど残されていない。細々とではあっても、その惨禍の記憶を歴史に刻む作業を続けていきたいと思う。青春のただ中で命を切斷された昂の鎮魂のためにも、それは私のやらねばならぬ「仕事」なのだと信じている。

※鳥取連隊のことで何か教えていただけの方をおられましたら、ご連絡いただければと思います。

## 著者のプロフィール

1953年 安富町安志生まれ。

1972年 山崎高校卒業。

ジャーナリスト。アジアプレス・インターナショナル代表。現在、立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科教授、早稲田大学大学院政治学研究科客員教授。

カンボジア紛争、ビルマ内戦、アフガニスタン内戦、エチオピア・ソマリア難民、チベット、東ティモール独立闘争、アフガニスタン空爆、中国、朝鮮半島など、アジアの社会問題を取り材。NHKを中心に200本以上のニュースリポートやドキュメンタリーを制作。第3回「放送人グランプリ特別賞」受賞。03・04年度朝日新聞紙面審議会委員。

編・著書に「沈黙と微笑」（創樹社）、「アジアTV革命」（三田出版会）、「メディアが変えるアジア」（岩波ブックレット）、「論争 いまジャーナリスト教育」（東京大学出版会）、「ジャーナリズムの可能性」（岩波書店）など。

90年代の半ばより、東京大学、早稲田大学などでジャーナリスト教育にも注力してきた。

# 短歌

白鳥は哀しからずや

山崎歌話会 山崎智絵

白鳥は哀しからずや空の青海の  
青にも染まずただよふ

この歌は、若山牧水の第一歌集で  
ある『海の声』に収められており、  
出版社は著者の下宿で、自費歌集で  
ある。

私が初めて此の歌に出会ったのは

十五歳の時であった。

その時の震えるような感動を、今

ここに述べるとすれば、心の琴線に  
ふれるという言葉があるが、正にそ  
の通りの気持だったと言えるだろう。  
心の底に秘めてきた細い糸が鳴り始  
めた瞬間のように思える。

わかりやすい語感と大らかな調べ  
からくるロマンチズムに、理由も  
なく直感的に反応したのだろう。

青い空と青い海、水平線は遙か彼  
方だろう。広大な自然の中にまぎれ  
ることの出来ない白鳥の生き物とし  
ての存在の哀しさ――。

青と白の色彩の対比、しらとりと  
詠む語感の清明さ、それからくる寂  
寥感は十五歳の柔かな心を魅了して  
やまなかつた。

これだけ豊かな感動をよびおこす  
短歌という、たつた三十一文字の此  
の不思議な短詩形に、私は急速に傾  
いていった。

この時、昭和十七年は第二次大戦  
の幕が切っておとされたばかりで、  
軍国主義のもっとも高揚している時  
であった。そのせいもあって、浪漫  
的な牧水の歌に心を奪われてゆく自  
分を許せない自分がいたのも確かだ

が、度の過ぎた内向性も手伝って、  
この昂りを誰にも話せなかつた。

あの時から、幾春秋が過ぎたこと  
か。終戦後の移り变りの激しい世相  
の中で、気が付けば私は牧水の歌と  
は、ほど遠い、アララギ系の結社で  
変りばえのない、老いの歌を作つて  
いた。そんな或る日のこと、短歌総  
合誌に、巻頭歌の批評文が掲載され  
ているのを読み、私は少なからぬショックを受けた。

牧水の此の歌にある白鳥は何処  
に居るのか。海上だという人も  
多いが、そうではなく空を翔ん  
でいるのである。ただよふは空

でなければならぬ。  
と、明記されているのであつた。

それを読んだのは、もう十年以上  
も前のことと、筆者の名前も忘れて  
しまつたが、いずれキヤリアのある

歌人の稿に違ひなく、私は、ただ呆  
然とした。長いつきあいである海上

の「白鳥」を、いまさら空中に浮か  
べるのは、容易なことではなかつた  
が、何しろ十五歳の直感だけで、海  
に浮かべてしまつたのだから、私が

間違つてゐる。そうにちがいないと  
私は思つた。

今、この稿を書くに当つて、何回  
か読み直すうちに、私の中のイメー  
ジが少しづつ變つてゆくのを覚える。

空ゆく時は空の青に染まらず、海  
上に浮かんでも海の青に染まること  
が出来ない。白鳥はしらとり故に何  
処にいても紛れることがない。隠れ  
る場所のない鮮明さから来る寂しさ  
を牧水は歌つたのだろう。としたら

白鳥は空に在つても、海に居てもよ  
いのではないか。牧水の見た白鳥は、  
空にも海にも群れていたかも知れな  
いと今の私は思うようになつた。

ところで、その時期の牧水の心象  
風景はどうであつたか、少し触れて  
みたいと思う。

明治四十一年早大卒業の前年よ  
り正月にかけ、房総根本海岸に  
年上の女性とのきわめて浪漫的  
な恋愛行があり、同四十三年に  
第三歌集『別離』にそれを書き、  
同四十一年の『海の声』もこの  
集に収録。それより一般に広く  
知られるようになった。この頃  
より大酒をのむようになる。

幾山河越え去り行かば寂しさの  
終てなむ国ぞ今日も旅ゆく  
文学辞典より抜粹

『海の声』を経て、『別離』に収めら  
れている。牧水のこれら青春歌は、  
口誦性に富み牧水亡き後（昭和三年  
逝去）も若者の心に深く浸透してい  
た。今はもう古典の中に組み込まれ  
てしまつただけなのだろうか。

牧水は酒と旅を愛した自然派の歌  
人として位置づけられ、アララギに  
も明星派にも付く事はなかつた。主  
要歌集だけでも十五冊、他にすぐれ  
た紀行文などがある。

現在の私が此の二首に出会つたと  
しても、あの若い日の感動は享受で  
きないだろう。束の間の青春にもらつ  
た震えるような感動を懷古しながら  
此の稿を終わりたいと思う。



俳

句

## 青嶺句会春の吟行

青嶺句会 山口 榮子

春の陽気に誘われて、近辺での吟行です。

最初に尋ねたのは、木の谷にある美國神社です。勤皇志士の墓が、整然と並んでいました。

・満開の花の下なる志士の墓

とみ代

・満開の花に埋もる志士の墓

みほ子

幾重にも枝をしならせ、あまたの花が咲きまるで天から降りそぞぐような桜、樹齢百年を超えると思われる老木は命を輝かせてています。

車に分乗し、次の目的地へ向う途中茶房にて一休みしました。

・咲き満ちる茶房の窓に大桜

ちえの  
花万朵

良子

春風が吹くたびに枝が、たおやかに揺れ、句友達も立ち上がり声をあ

げて目を細め眺めていました。

・風吹くな散らすに惜しや古桜

茂太

・見くらべる山桜よし桜良し

緑山

すばらしいものでした。充実した一日を送り句友の皆さんも満足の、声、声で解散しました。

## 山崎俳句協会

青嶺句会詠草

晩学に紅薄くさし文化の日

秋久 光子

定年後畠一途に文化の日

大谷 延子

返り花入選知らず逝きし夫

門積 緑山

吟行の俳句日和や返り花

茂田 茂太

病む窓にほのとやさしく返り花

下村 君子

勳章を胸に晴れやか文化の日

杉山美保子

満たされて美術展出る文化の日

田中 良子

置き去りの鉢に一輪返り花

鳥羽チエノ

月浴ぶやどこか遠笛夢淨土

山中 正子

用無くも籠りておれず秋日和

藤阪加代子

淡き陽を淡くはじきて返り花

永井とみ代

さわらび句会詠草

眉やさし楊貴妃觀音聖五月

庄 昌子

椎の花古刹包みて匂ひけり

山岸その子

姉妹して丹波の里に落採りに

小林 紫生

一望の向日葵すべてこちら向き

山中 正子

月浴ぶやどこか遠笛夢淨土

藤阪加代子

用無くも籠りておれず秋日和

川崎 栄子

土道の失せゆく町や赤とんぼ

薄木満寿恵

鉗もて消しゆく庭の石落灯

本條 淑子

冬麗の水に彩なす錦鯉

藤井 七代

孔子廟ゆかりの楷の落葉掃く

浅田 燕耕

山脈句会詠草

天界の師の声胸に文化の日  
三浦 ゆき

返り咲き裳裾華やぎ六地蔵  
山口 榮子

平成二十一年春の吟行、山崎町内ではありましたが、桜の美しさは、

・春風に誘われ吟行与位の旅

のぶ子

泊水

孔子廟ゆかりの楷の落葉掃く

福田 駆雲

立ち寄りし茶房より観る花万朵

良子

春風に誘われ吟行与位の旅

原田 駆雲

花万朵峡の日和の定まりて

泊水

返り花慈しむ如陽のやさし

福田 駆雲

墨摺れば墨の香高し文化の日

良子

墨摺れば墨の香高し文化の日

原田 駆雲

孔子廟ゆかりの楷の落葉掃く

泊水

孔子廟ゆかりの楷の落葉掃く

福田 駆雲

衣更え水兵服着し昔かな

池田 陶瓦

枯菊の残りの色香焚きにけり

宇野 幸子

肌つつむ柚子の香りの湯舟かな

栗山きよみ

古城趾に迫る山道笛子鳴く

高田おさむ

笛子しきり旅の疲れのうたた寝に

田中 恵

平安の音を軋ませ鉢廻す

西田 宣子

裏庭に日の香笛の香笛子鳴く

福田 祥栄

### 白牡丹句会詠草

休み田に獸が遊ぶ霜月夜

宗平 圭司

今日の菊薰る仏間の影ゆれて

三浦 ゆき

播磨路に春をせかせる白き雨

松本 壽子

片ようすこだわらずして日の短

福井 清翠

それぞれに影持つ羅漢日脚伸ぶ

鳥羽チエノ

山上は闇ごと凍ててしまいけり

千種 洋子

残照の雲をはるかに秋の峰

田中 慶英

渓流に沿いてもみじの屏風かな

井口 洋子

### 山崎みやこ句会詠草

風のごと日々かけ抜けし年の暮

東 田鶴子

抽斗は多いほどよし冬支度

是兼 妙子

なつかしき圍炉裏圍みて父母想う

坂井 恵子

ぼこぼこと柚子浮かびくる仕舞風

呂 坂井 小百合

古箒銀杏落葉になやまされ

坂井 久栄

辞世の句詠みて迎える春八十路

坂井 弘昌

年の瀬に仏具磨きて清々し

竹野 優子

### しそう学遊句会詠草

冬めくや夕暮れ白く月あかり

小田 朝子

信濃路の碑を訪ね來し一茶の忌

垣内 安代

山茶花の赤白散つて陣取りぬ

内藤 裕子

若き日の愚行を詫びて菊供う

土井 洋美

## 第三十一回春の芸能祭ご案内

日 時 平成二十二年五月二十三日（日）

午前十時から

場 所 宮栗市山崎文化会館（サンホールやまさき）

主 催 宮栗市山崎文化協会・財團山崎文化振興財団  
後 援 神戸新聞社・宮栗市教育委員会・宮栗市

会員の日頃の練習の成果を、ぜひご覧くださいよう、  
ご案内申しあげます。

参加部門 山崎詩舞道連盟 山崎邦楽邦舞研究会

さつき民踊グループ 山崎民謡連合会

その他宮栗市内より賛助出演



光客にも人気の場所であった。

○根来寺（和歌山县岩出市根来）

## 平成二十一年度 研修旅行の報告

山崎郷土研究会

宗 平 圭 司

晴天に恵まれた昨秋十月一日、山崎文化協会と山崎郷土研究会の合同主催による研修旅行が実施され、次の三か所を巡った。

### ○熊野古道・滝尻王子社

（和歌山県田辺市中辺路町）

熊野には九十九の王子が祀られており、滝尻王子は特に格式が高いとして崇敬されているところである。

熊野の靈域の入り口とされたところのとても重要な場所で、富田川と石船川の合流点にあり、熊野詣での道中で最も神聖視された川のほとりに静かな佇まいを呈していた。その裏山に広がる急坂の古道を歩き、熊野の自然に抱かれた趣きと、いにしえの威厳にあふれた美しさを堪能することができた。

### ○熊野古道館

田辺市中辺路町には十二の王子社があり、これにちなんだ十二角形の建物が平成六年度に観光案内と歴史紹介を兼ねた休憩施設として建設された。熊野懐紙や滝尻王子社の所蔵品などの展示や、熊野古道のビデオと古道再現絵巻のコーナーなど、観

覚鏡上人）の御廟を祀り、葛城連峰の端に約三五〇万平方メートルの境内を所有する名刹である。

興教大師は二十才で高野山に登り

眞言密教の振興に努力したのである。

やがて鳥羽上皇の庇護を受け学問

探求の場である「大伝法院」と修禅

の道場である「密嚴院」を高野山上に建立し大いに隆盛した。

しかし、高野山の一部の人との間に確執を生じ、結局一一四〇年に現在地の根来に移っている。

その後戦国時代大きな戦力を備えたため、豊臣秀吉は一五八五年根来に攻め入り全山を焼き払っている。

やがて紀州徳川家の庇護を受けて主要な伽藍等が復興。「根本大塔」や宗祖興教大師独自の教学をあらわす大日如来像・金剛薩埵像・尊勝仏頂像の三尊を祀る「伝法堂」を中心となっている。

また境内は中世の佇まいを残し秋の自然美を心ゆくまで味わう事が出来た。



熊野古道の一部

## 自 然 保 護

山崎植物同好会 井 口 武 一

TBSの番組「バンバンバン」で、

原の滝の紅葉が放映されました。タ

レントの板東英二、マルシヤさんた

ちが、登山道から逸れ谷間や岩場をロープなどを使って滝壺まで行く、

獣道の道中を生中継する一時間番組

でした。

その準備が数日前から行われました。カメラマンは、紅葉のブナ、イロハカエデ、オオモミジなどを撮影しておき、当日タレンツたちが一息入れたり、移動する間をぬって資料として差し入れ放映するのです。私はその資料作りのお手伝いをしました。

滝附近は湿気があり、シダ類コケ類が多く、珍種もかなりあります。

例えばエビゴケです。中生代の生き残りで「生きた化石」とも言われ世界に隔離分布していて、地球の歴史を考える上でも役立ちます。これが行く手の大岩に張り付き見事な群落を造っているのです。コケほど環境に影響されるものはありません。条件が良ければどんどん繁茂し、ちょっ



す。でもそれを守つて行くことも大切です。自然保護の難しさをつくづく考えさせられました。

# 蘭への思い

新潮会  
長田一三



蘭は長寿の草と言われ、私も八十才の蘭づくりとなりました。蘭と共に過ごして来た者には、何時までも変わぬ伴侶がいてくれて毎日を楽しく過ごさせてくれます。朝の目覚めから夜寝るまでの間、頭から蘭が離れてしまうということはありませんし、蘭舎の中で過ごす時の何と楽しいことでしょうか。蘭は有難い、とつくづく思います。

特にこれまで無かった新しい蘭を手に入れた時には、緊張感も伴つて興奮を覚えるものです。未知の不安もあります。上手く栽培出来るものかどうか、枯らしてしまっては申し訳ないなどという思いが絡まって複雑な気持ちですが、新しいものを手に入れたという喜びは忘れられないものです。又交換会で気に入った蘭を入手した時の喜びなど、身近なところにも蘭を手に入れる喜びが待っています。

蘭の栽培は四季それぞれの楽しさがあります。春の芽出しから、目に見えて成長する夏、それらが仕上がる秋、自然の美しさ生命の尊さを感じさせてくれます。そして静かに次

じさせてくれます。そこで静かに次

# 私の碁歴と碁の魅力

山崎囲碁同好会  
小林謙二

蘭の新芽のために力を溜めている冬の蘭に、人生の教訓を授けられたりします。

一作だけではその蘭の持っている

素質の全てが理解出来るものではありません。二作、三作と育てているうちにその蘭のよさがよく判つて、より適した栽培法につながるように思われます。

春蘭展や寒蘭展でみんなに騒がれるような蘭を育てたときは、栽培に神経を使つたものです。採光の強弱、施肥、灌水の多少など適切な栽培を心掛けねばなりません。そのためには、詳しい觀察が必要で熱心に世話をしてやることが大切です。

八十五才を過ぎても何事かに意欲を燃やせるということは嬉しいことだと思います。

蘭づくりをしているからこそ、今こうして日々新たな気持ちを湧き立たせることが出来るのです。平和な国に心より感謝している昨今です。

ちがプレッシャーになつたのか苦しい一局でした。

対戦相手は二段、私の大石はきびしい攻めに、欠け目二だけ、どう考えても生きはありません。ところが盤上をよく見ると欠け目二つでも私の石は環状に切れ目なく連らなって

いるため生きていることに気付きました。滅多に起り得ない珍らしい碁形でした。しかし、そのことに気付かれずの楽しさを紹介したいと思います。

私が二十三歳の時、会社の寮でいつしょに住んでいたのが、十九歳で私の師匠碁キチ君です。彼は仕事以外は碁ばかりやっていました。乗気の

ない私にも熱心に教えてくれました。碁が少し打てるようになつた私は七子置いて対戦したが全然勝てなかつた。其の後退社したので私は取り残されましたように碁をやめてしまつた。

二十六歳、ある事がきっかけで、本格的に始めました。三十歳の時大阪府堺市に転勤となつた。碁力は初段でした。

大阪では多くの大会に参加する事で実力が付いて来た感じがした。ある段認定大会の一局が、忘れられない迷局になつたのです。この一局に勝てば二段に認定されると思う気持

ておられました。碁は勝つても負けても最後は笑つて終るのが最高だと思います。

其の後他の趣味に力を入れすぎたが、現在までに少しは強くなつたかな、もう少し打てるようになりたい。年取つても楽しめるのが碁のいいところです。

## 華道に思うこと

山崎茶華道連盟

北山糸圃



春は新緑、秋には紅葉、冬は雪景色と、私たちは昔から四季おりおりの自然の美しさを楽しみ、自然の恵みに感謝しながら生活してきました。華道においても、自然の美しさや恵みを生かし、四季の移り変わりを楽しんでいます。

例えば、愛らしいサンシュウ、三色の満作、ふっくら優しい枝垂桜、春風を運ぶ柳の新芽、そして、老木にボツリボツリ咲く梅の花など数えきれないほどの花があり、一つ一つがつた美しい姿を楽しませてくれます。また、心を癒してくれます。山里を歩きながら花材を探し、野の花、里の花に目をとめ、自然に感謝しながら、心を込めていけ上げる枝ぶりや色彩、全体の調和を考えながりけ上げた時のよろこびは、私にとって感動です。華道の技能面のみならず、人としてのあり方、花一輪の美しさ、そして、人を敬うこ

との大きさを華道を通して教えられたように思います。

去る九月十二・十三日兵庫県いけばな展ふれあいの祭典（たつの会場）

に参加させて頂きました。会員の日

ごろのお稽古の発表の場でもあります。流派の親交を深め、更なる技術の向上と知識を広げる良い機会となり、また、地域の方々にも、いけ花を知つていただき、楽しんでもらつたりする場ともなりました。

華道は奥深いものだと思います。同じ花材を使ってもいけ方は、一通りではありません。これからも流祖の教えや基本をよき教訓として、努力を積み重ね多くの人々に親しまれるいけ花になるよう努めていきた

いと思っています。また、伝統文化であるいけ花を通して、地域の芸術文化の発表に協力していきたいと思



## ダムの心得

山崎謡曲同好会  
塚田清一

昨年の衆議院選挙で民主党が大勝し、多くの国民が待望していた政権交代が実現しました。選挙のマニフェストの重点施策のなかのひとつである全国各地において建設中、計画中のダム工事の中止、見直しの問題が大きくとりあげられています。

その進捗度は一様ではなく、地域住民の意識、またかかわりのある役所、企業等の利害関係、そして地域の産業（農林業、観光業等）への影響度等、多種多様の問題点がある様です。この施策実行の為には大変困難な調整作業をともなう事でしょう。

しかし、ダムを作るという事を、"ムダ使い" のお題目で論議して良いものかどうか考えてみました。

雨が降る。山に降る。降った雨は地にしみこみ、谷水となり、川となり、平野をうるおして、海に流れる。この流れがうまくいけばよいが、ちょっと狂えば洪水となり、又反対に旱魃

ともなる。流し放し、使い放しの結果です。そこでダムを考える事となり、流し放しをせきとめ、溜めたそする。人間の智慧の進歩の産物です。大河は大河なりに、小川は小川なりに、適応したダムがすでにたくさん作り上げられております。又利水度低下、自然保護、コスト高等、もうこれ以上必要ないという世論が多いのも当然だとも思いますが、やはり河川にとつてのダムは必要なものではないかと思います。

私達の暮らしのなかでも川にダムが必要な様に、物心ともにダムがいると思います。ダラダラと流し放し、使い放しの暮らしではまことに智慧のない話です。人それぞれに色々と智恵を働かせば様々なダムが出来上がるはずです。個人の暮らしの上だけでなく、事業経営の上、又社会組織内の活動の上でもこのダムの心得が是非ほしいと思います。

そしてさらに大事な事は国家の運営にあたっても、このダムを是非作って頂きたい。国家と国民の安定した真の繁栄のためにも。

## 合唱団の思い出

山崎児童合唱団

稲澤朋子

私は、小さいときから音楽が大好きでした。それをきっかけに、一年生のときに入団しました。週に一度だけの練習日を、まだかまだかと楽しみにしていました。歌う楽しさや音のハーモニーを味わい、どんどん合唱団が好きになりました。初めのうちは腹式呼吸ができずに声があまり出ませんでした。しかし今となつては、だいぶ声が出るようになります。それは、ずっと続けてきたおかげです。

合唱団で一番楽しかったのは、ミュージカルです。歌うだけでなく、セリフやダンスも入るのでとても楽しかったです。そして、みんなで協力してやれる、というのが一番です。

私は、音楽が大好きです。音楽は、人の気持ちを動かす、とてもすごいものです。合唱団を卒団するのは、とても辛いことです。でも、ずっと続けてきたこの六年間を、これからに生かし、たくさん的人に音楽のすばらしさを知つてもらいたいです。

私にとって音楽は、すぐ近くにあり、私自身をいつも支えてくれる、大切な存在です。これからも、一生音楽と一緒にします。



ミュージカル やまたのおろち（第32回 定期演奏会）

## 楽しかった合唱団

山崎児童合唱団

溝端安裕美

私は幼稚園のころ、合唱団に入りました。入団したばかりのときに、いっしょに行っていた友達がやめてしまって、私は合唱団に行くのがい

やでよく泣いていました。

でも合宿などで友達ができると、合唱団が楽しくなって、卒団セレモニーのときには、本当に卒団すると思うとすごくさみしかったです。

ミュージカルでも、六年生は全員大変な役だったので、毎週夜おそくまで練習するはしんどかったけど、たくさん練習して、初めは恥ずかしくて、なかなかできなかつた動きやせりふも、だんだんできるようになり、本番は大成功でした。

最後のミュージカルを成功させられて、とてもうれしかったです。

このことは、良い思い出になったと思います。

## 児童合唱団の思い出

山崎児童合唱団

藤井華葉

私が合唱団の中で一番思い出に残っているのは、六年生最後の定期演奏会です。私は、この定期演奏会に向けて、歌の練習、ミュージカルの練習をがんばってきました。低学年の頃は、ちょっと立っているだけでしじんとかつたり、とても大変な思いをしました。それでも定期演奏会に

を成功させようとがんばりました。

特に今年は最後なので、一生懸命練習にはげみました。その成果が出たのか定期演奏会は、大成功しました。私はうれしさで胸がいっぱいでした。

合唱団では仲間の大切さに気付かされました。つらい時も笑っていらっしゃるのは仲間のおかげです。しんどい時も頑張れたのは仲間や先生達のおかげです。誰か一人でも欠けたら舞台は成功しなかったと思います。六年生最後の定期演奏会の思い出は、おばあちゃんになつても、ずっと忘れません。



ミュージカル やまたのおろち（第32回 定期演奏会）

# 恩愛の中に生かされて

さつき民踊グループ

大園達子

私の知人に真に大らかで実に気持ちの良い人がいます。彼女と話をしていると先程まで感じる事を忘れていた私の心に優しさや親切心・誠心をノックしてくれます。話が弾み何とも爽やかな気分になり時間が経つのも忘れる程で、又次に会うのを心待ちにしている自分が居ます。彼女言わく、子供の頃から「誰からも好かれる優しい子になりなよ」と両親に愛情一杯に育ててもらつた数々が語られます。彼女の姿に感應される事多々あり私もある様でありたいと彼女の姿に真似てみようと心掛けました。すると少しばかりの心遣いの表現に笑顔いっぱい返してくれます。私の仕合せな一時です。喜んだり、失敗に落ち込んだりを繰り返す日々の中、人は誰も生まれながらに倫理力がセットされているものと知る時に眠っている倫理力を引き出し合える私であります。

先日ある本の一節に、「無限に与え続けるのが自然であり感謝しても感謝しても感謝しつくせないと感じるのが人間なのです。そしてそうした自然に対する感謝の気持ちが対人関係の間にじみ出てそれが行為となりた時親切となり、これが社会的に現われる時奉仕となります。森羅万象を司る宇宙大自然の偉大な力によって生かされ、また多くの人々の恩愛の積み重なりの中で昨日も今日も明日も生かされているのです。だからこそ私たちは自分を生かしてくれる大きな力、人間の知恵では計る事の出来ない巨大な恩に感動するのです。何事も感謝へで送る時さまざまな恩の重なりの中に生きているのだという倫理の自覚によって一段とうとう宍粟は一つの市になってしまった。

そして今、山崎美術協会と宍粟美術協会の合併の話がでています。山崎美術協会は昭和三十四年に発足しましたので、今年で丁度五〇年になります。一つのけじめの年ともいえるでしょう。

## 山崎美術協会の今昔

山崎美術協会の創立当時のことを振り返ると、初代会長は安富町の小林善太郎さんで、副会長は山崎のお医者さんだった友沢庄二さん、事務局長は学校の先生だった伊藤親保さんでした。

会議は友沢先生の家の離れ、みつわ別館や菊水などで開かれ、会議の後は延々と懇親の会が続くのが普通でした。また、事務局長の伊藤先生が引原分校へ転勤されると、自宅からの通勤は不可能でしたので美術協会の活動も一時中断するという、のんびりしたものでした。

しかし、山崎美術協会展をする時だけは違っていました。会員が作品を持ち寄ってただ並べるというような単純なものではありません。作品に序列を付けて並べるので。つまり、写真、日本画、洋画、書、工芸、それぞれの分野ごとに審査員を呼び、審査をしてもらって陳列をするのでありました。

序列が下で気に入らないと作品を持ちかえる人もあり、審査員を選ぶ時など喧嘩<sup>けんか</sup>囂囂<sup>こうこう</sup>でした。

でも、審査をして作品を並べるという流れがあつたので、昭和四十年に西播では一番早く山崎町が公募展を開くことができたと思います。

半世紀が過ぎた今も思うことは、作品を作る材料も、制作の過程も全く違う陶芸、染色、漆芸、七宝焼きなどをどのように比較して評価をすらるのでしょうか。非常に微妙です。私は審査をする先生をただ信じ、自己の研鑽の糧としたいと思います。

## もみじ祭

### 野外コンサート

バンブーファイブ

大部 正 勝

十一月十五日、山崎町最上山もみじ祭の会場で野外演奏会に参加させていただきました。当日は、前夜までの時雨も気持ちよく上がり少し冷え込んではいましたが絶好の行楽日和でした。山の紅葉は、その盛りを少しばかり過ぎてはいたようですが、近郊の市や町からの大勢の観光客で朝から賑わっておりました。

昔嘸を一つ。昔、伊和の神様、山崎町より二十九号線を北へ約一〇km程行った所に、播磨の国一宮伊和神社がありますが、この神様が佐用に、八月の水害で大きな災害に遭った町、この佐用町の佐用都比賣神社に、とても美しい女神様がおいでになると云う噂をお聞きになり、稻の取り入れも終った或る秋の夜、密かに妻問い合わせました。お二人はすてきな楽しい一夜をお過ごしになりました。ふと目をお覚ましになつた伊和の神様は「これは大変。あまりにも楽し



い夜だったのでついつい寝過ごしてしまった。今から帰ると私の姿を村の人たちに見られてしまう。」

夜は白々と明け始めて、既に朝日が東の山の端より顔を出そうとしておりました。そこで女神様はおっしゃいました。「お姿を見られずにお歸り頂くよう私が貴方を霧でお包みいたします。その間にそっとお帰り下さい。」すると、たちまち辺り一面に白い霧が、一寸先も見えぬほど深く深く立ちこめて、神様は村人達にそのお姿を見られる事無くお帰りになり、一言おっしゃいました。「夜霧よ今夜も有り難う」

次の曲は尾島さんの尺八で今は亡き石原裕次郎さんの大ヒット曲「夜霧よ今夜も有り難う」です。どうぞお聞き下さい。

昔嘸を一つ。昔、伊和の神様、山崎町より二十九号線を北へ約一〇km程行った所に、播磨の国一宮伊和神社がありますが、この神様が佐用に、八月の水害で大きな災害に遭った町、この佐用町の佐用都比賣神社に、とても美しい女神様がおいでになると云う噂をお聞きになり、稻の取り入れも終った或る秋の夜、密かに妻問い合わせました。お二人はすてきな楽しい一夜をお過ごしになりました。ふと目をお覚ましになつた伊和の神様は「これは大変。あまりにも楽し

## 宝塚と日本舞踊

山崎邦楽邦舞研究会 藤間 豊己千

「伝統を受け継ぐとは、過去にしがみつく事ではなく、あく迄も前向きの姿勢を崩さない事だ。それはひとえに古人に対する愛情の深さによる」と云われた事を胸に日本舞踊にたずさわっています。

只、近年舞踊人口が減少し、現代

人の生活と急速にかけ離れています。わざかひとつ世代昔であれば、習い事として日本舞踊は至極一般的であったと思いますが、ほんの数十年の間に、日本の文化に対する一般的な理解が変化し、日本の伝統文化はもとより、日本舞踊も衰退の一途をたどつているように感じていました。

過日一門と共に、宝塚の舞踊会に出向きました。そこには何とも嬉しく力強い舞台がありました。宝塚と言えば普通誰でも洋舞ひとすじと思ひがちですが、各組の中から又専科から、日本舞踊を愛する人達が集まり、開いた日本舞踊の会でした。それと「五旬桜義絵巻」と題し、歌舞伎の名作中から「菅原伝授」「仮

名手本忠臣藏」「義経千本桜」を舞踊化した「長唄鞍馬山」「長唄橋弁慶」「清元吉野山」「常盤津引八島」「長唄賤の苧環巻」といった演目で舞台がくり広げられました。

よりすぐりの美人と若さの面々、うなるのも当然でしょうが、只それだけでなく、しづやしず静の苧環巻だけではなく、乱れる心を抑えながらくり返しと、乱れる心を抑えながら舞う白拍子静の、緋の長袴の足さばき等、見事な舞に惜しみない拍手がなりやみません。舞台人が表現する為には日本舞踊が基本であると言う事をきき、この会もそう云う意味をもち、今年で五十回目に当ると言ふ事でした。五旬とは五十と云う意味だそうでこの宝塚に、日本舞踊だけの会が五十回目を迎えたと云う事は、基本を踏まえ時代に沿った「心」と「表現」を取り入れ、代々受けつがれている事と思い、私も微力ながらそういう「心」を持続けていこうと思います。

# 日本武道館への道

山崎詩舞道連盟

小田 博己

第四十二回全国吟劍詩舞道大会が平成二十一年十一月八日、日本武道館で実施され全国から五十チーム（一チーム平均五十三名）が参加して覇を競いました。我が賀堂流近畿本部男子は平成十九年四十回で七位という実績を残しているが今回優勝を目指に挑みました。

まず四月九日結団式、メンバーは男子五十五名を選抜、練習は月二回、計十五回、服装は紋付の着物に袴、吟題は、廬山の瀑布を望む（李白）日は香炉を照らして紫煙を生ず遙かに看る瀑布の長川を挂くるを飛流直下三千尺 疑うらくは是銀河の九天より落つるかと  
〔大意〕香炉峰にかかる滝は日の光に照らされて紫煙にかすんで見えるその長さは三千尺にも達するという雄大な風景を謳つたものです。

十一月八日、いよいよ本番、全国各地から吟士、役員が武道館に集結し超満員の混雑、そしてついに我々

の出番がやって来ました。緊張の中必勝を期して意氣高揚「廬山の瀑布を望む」を力一杯吟じました。

快心の出来だ！ヤッタゾ！と自信

／そして成績発表、はじめに入賞チムが発表され、三位、二位、ついに一位の発表。見事“優勝”と絵に書いたようにはまいりません。我々のコールはついになかったのです。世の中、そんなに甘くはないなということを思い知られました。

我々がこの八ヶ月間、武道館への挑戦で得たものは一体何だったのか。それは五十五名が一丸となって挑んだという



# 町民合唱によせて

山崎町合唱連盟 栗山祐子

現在の図書館の場所に建つておりました下村記念館において町民合唱の演奏を初めて聴きましたのは中学生の頃でした。あれから四十年余りの年月が経過しておりますが多くの方々に支えられ歌い継がれたこの合唱団、ご縁がありましたのか在籍させていただいております。

この地の合唱の歴史の中で近年感じることは、かつて美声を持った方々が寄つて歌を重ねるというスタイルから個々の歌の大好きな方々の声を一つに統一するハーモニー重視のまさに本格的な合唱の原点をめざすまとめ方がなされるようになってきたということです。まとまるというものは心地よいものでこの成功的味を体験されているからこそ日々の難しい音程に四苦八苦ししながらも練習に足を運び努力され真に一つのまとまったハーモニーに心ふるわせる感動をまた味わおうと頂点を目指し今日も練習に足をはこびます。



# 和太鼓をとおして思うこと

宍粟和太鼓アーツ倶楽部 藤 永 幸 正

## 合同研修旅行

播磨さつき会 田 口 實

宍粟和太鼓アーツ倶楽部は、和太

鼓や篠笛をとおして、この宍粟の町に伝統芸を広げていくことを目的とした団体です。

和太鼓では、小学校を中心とした「子ども和太鼓教室」と小学校高学年から中学校を中心とした和太鼓「倭童子」、大人の部としては和太鼓集団「倭音」や全員が女性メンバーの和太鼓「音羽」、そして篠笛教室の五つの団体で構成されています。練習日は、水曜日と木曜日に宍粟市山崎文化会館の舞台等をお借りし、練習に励んでいます。

発表の場としては、地域でのイベント等で披露もさせて頂いています。が、私たちは年に一度、文化会館において宍粟和太鼓フェスティバルを開催しています。この度も二月二十一日に第四回をむかえて盛大に行うことが出来ました。たくさんの方に足を運んで頂き、また舞台を創り上げるために、たくさんの方にお世話を

になり、本当に感謝しています。

さて、私自身も太鼓を始め、五年程になりますが、日頃の練習や舞台を経験させて頂くにつれ、最近では自分自身の至らない部分がよく理解できるようになりました。この年齢になつても分かっているようで何も分かっていなかつたり、それに気付いてどうすればいいのか前向きに考えられるようになりました。そして太鼓をはじめるようになつてから、単に太鼓が上手くなるという目的だけでなく、太鼓をするためには、基本的な体力作り、自分の現状を見つめること、取り組む姿勢や礼儀など大切にしなければならないことがたくさんあることに気付きました。

何事も前向きにこれからも宍粟和太鼓アーツ倶楽部が、ますます発展していく様頑張っていきますので、皆様よろしくお願ひ致します。

平成二十一年度第五十一回目のさつき祭は、新型インフルエンザの影響で中止したことについて多くの皆様からのご批判もございましたが、顧みるに今なお県下の学校に至つても学級閉鎖等が続く状況にあり実行委員会としては、臨機応変の処置であったと思うところであります。

さて、私達さつき会・花木部会会員は相互の親睦と生産技術の向上を図り、明るい社会づくりに貢献することを目的とし、二年に一回先進地の視察、研修旅行を実施しております。今年は宍粟にお越し下さるお客様のニーズに添った幅広い視野で取り組むべく滋賀県に行きました。

標高八四〇米の比叡山頂に造られたフランス印象派画家たちの作品をモチーフにした、庭園美術館ガーデンミュージアム比叡を見学、季節の花々やハーブが咲き匂う園内には、モネ、ルノワール、ゴッホなどの絵画を陶板で再現して展示され、自然の光の中で鮮やかにみがえる印象派の絵画、季節ごとに表情を変える花々、生憎の天候でびわ湖や京都の遠望は駄目でした。

帰路は一二〇〇年前伝教大師最澄が日本の國の安泰と國民の幸せを祈つて日本人に合った仏教を比叡山に開いた延暦寺の諸堂におまいりました。後世、特に鎌倉時代には法然、栄西、親鸞、道元、日蓮などと云つた祖師方が修行されたところです。翌日、近江平野のどまん中に建てられたJAとうみんちファームマーケットを見学、旬彩蔵の約十倍を想像して下さい。地産地消を合い言葉に頑張っておられました。ひき続き、近江商人屋敷を個々に分れて見学。日程の最後に山野草鉢専門の信楽焼窯元「丸利窯」を見学、当窯の植木鉢は、信楽焼で丸利窯独自の釉薬と手づくり鉢を中心全国シェアで愛用されています。私たちはお気に入りの山野草を、お好きな鉢に植えて楽しみ、季節ごとにいろいろな山野草を植えて何年も味わう器選びの目も養うことができました。以上、紙面の都合上極く一部分の紹介報告いたします。

## 耳を澄ませば

平成会  
藤村哲朗

今年の一月、カリブ海の島国ハイチで大きな地震が起り、多くの犠牲者が出了。ニュースでは被害の凄まじさに加えて、その後の混乱の様子が映し出されていたが、茶の間でストーブに当たりながらテレビを見ている自分の状況にふと困惑を感じた。そういえば十五年前にも同じような困惑を覚えた気がする。あれは阪神大震災であった。車で一時間ちょっとの距離で起こった大惨事を第三者の視点で見ていた自分がいた。

自然災害に対して私たち人間はどこにも怒りをぶつけることができない。怒鳴つたて自然是謝ってはくれないので。それに、いつどこで起こるか予測がつかないので防ぐこともできない。しかし、それでも人間だから怒りがこみ上げ、悲しくなる。先の見通しの立たない状況の中で立ち尽くす。でも、やっぱり頑張ろうと考えて前に進もうとする。

ところが困難がまたやってくる…。

昨年、ここ宍粟でも豪雨災害が起り、多くの方々が苦しめた。各個人での義援金に加え、平成会でもとりまとめて義援金を送った。しかし、私たちが苦しんでいらっしゃる方々の本当の気持ちを理解できていたかどうかわからない。

平成会では、地域に密着した様々な文化事業に取り組んできた。園児を連れてのジャガイモ掘りや大晦日のカウントダウン、コンサートも数回開いている。そして、これらは地域の皆様の好評を得ており、引き続きやっている。しか

し、もっと地域の声に耳を澄ませば、まだまだ私たちの知らないことがたくさんあるように思う。様々な場所で様々な人が喜び、悲しみ、怒っている。その気持ちをもっと真剣に考えれば、もっと素敵なことができる気がする。日々研鑽。平成会の努力

## 盆踊りについて

山崎民謡連合会

小野瑞巖

大会」とし、民謡の会（日本民謡昇会）と興国寺の共催とし、時期は地蔵盆に因み八月二十日前後に行っています。

ご承知のとおり盆踊りはその昔、

お釈迦様の十大弟子の一人、目連尊者が自分のお母さんを餓鬼道から救われた時に喜びのあまり立ち上って、まわりの人々と踊られたのが始まりだと言い伝えられています。

盆踊りを再開した頃は町内でも行なっていました。

そこで今から三十数年前姫路から、日昇会主中川昇先生を迎えて、民謡教室が始まりました。当時の教室での練習日に何気なく、住職として盆踊りを復活させたいと告げると、先生以下全員賛同して頂け、みんな道具等を持ち寄り、太鼓等は借り物で、正に手作りの盆踊り再開でした。平成二年より現在まで続けていますので、本年で連続二十回となりました。

地元山崎では、人気の踊りは「しゃんとこ」等ですが、興国寺は姫路城ゆかりの寺ですので「播州段文音頭」を中心に行い、それでも盆踊り保存会の協力を得て地元人気の踊りも加



# 川柳で世の中 楽しく

川柳破丸会  
清 水 省 三

雨の日は テレビの中の 旅をする  
田中 万来  
マスコミが 爆つてるよな この不況  
今週も月水金で あと土日

谷口 柳幸

## ターン・アート クラブの誕生

ターン・アートクラブ代表  
福 岡 久 藏

だきましたし、喜んでもいただいた  
のですが同級生や親しい仲間以外は  
「松井さんってどんな人」というこ  
とで終わつたようです。

松井氏は府舎や学校、その他、公

共の施設に絵を寄贈しています。  
山崎文化会館の縞帳の原画も彼が

描いたものです。

松井氏に限らず、宍粟に生まれ、

宍粟で育った人たちが絵や彫刻、写  
真やデザイン、工芸美術など多方面  
で活躍されていますが、案外、宍粟

の人には知られていないようです。

山崎八幡神社に新しくできた能舞

台の奥の正面の老松や戸口の竹林の  
絵は嵯峨美大准教授の杉山真由美氏  
によるものです。

松井氏の遺作展をしたことが契機  
となり、各地で活躍している人達と  
地元宍粟で頑張っている人とが相集  
い、ここ宍粟の地に作品を寄せ、展  
覧会をしよう。児童生徒には美術教  
室を開いたり、作品の批評会などを  
しよう。そうすることで、地域の芸  
術や文化意識の向上を図るとともに、

児童、生徒の情操を育み、若者に夢  
や希望をもたせ、その実現に、支援  
を送ろうと「ターン・アートクラブ」  
を設立しました。

毎月一回五句ずつ提出して、お互  
い遠慮のない発言をし賑やかな会合  
をしています。

政治経済など世相の事から家族の  
事などなんでも句材になり腹の底か  
ら笑える楽しい会です。

どなたでも御入会を歓迎いたします  
。

パチンコ代 費用効果で 仕分けされ  
八百万 神の数だけ 祭りあり

岸本 新風  
目に若葉 花粉も黄砂も おまけ付き  
老いて尚 口だけ達者 うちの母

香山 釣遊  
脳ゆるみ 卷き返すネジ 締らない  
孫巣立ち 静けさの部屋 物置に

是兼 芽吹  
スーパーの 駅弁二つ 旅気分  
母の日の 少し派手めの プレゼント  
志水亀の子  
ばあさんが 留守番してて 敬老の日

梅桜 いつも花屋で 先に咲く  
川柳で 片付かない程 悩みふえ  
持ち物に 杖が増えます 旅仕度  
秘め事か あばかりそうな 秋の空  
別バラと言えば子が聞く どんなバ  
ラ  
贈答品 受けて早速 値踏みする  
千本 花夢  
親しげに 話しかけられ 名を問えず  
都合よく 覚えています 認知症  
中津 水香  
ケンカして 二人の家が なお静か  
ゆつたりで 伸びるか確かめ 買う下  
着  
坂東 笑雅  
酒タバコ ダメダメダメと 仕分けさ  
れ  
ごはんまだ 女房が夕食 聞いてくる  
清水 三省

二紀会に所属し、二紀展で菊華賞  
を二回と文部大臣賞をとった松井叔  
生（本名・松井良通）氏が平成十九  
年一月に亡くなりました。

彼は、春がくると山がパステルカラ  
ー調に輝くとか、夏がくると十二  
波で日が暮れるまで遊んだとか、秋  
になると紅葉山に登り女の子の話で  
持ち切つたことなど、この山崎の美  
しい自然とともに生活していたこと  
を繰り返し話していました。

また、子供の頃の友達の消息を尋  
ねてはそうかそうかと頷き、時を忘  
れて話し込む話し好きでした。

そんな彼でしたので、親しかった  
者が寄つて、平成十九年五月、四号  
くらいの小品から、二〇〇号の大作  
まで、防災センターに所狭しと並べ  
「松井叔生遺作展」をしました。

なかなかの圧巻で「いいですね」  
「すごいね」とお褒めの言葉をいた



いぎだに  
生谷温泉

# 伊沢の里

○お祝いの会食 ○法要後の会食  
その他各種宴会承ります

〒671-2517 宍粟市山崎町生谷214番地1 TEL0790 (63)1380



◆最新型カラー現像機導入◆

カラープリント・スピード仕上げ  
良い品を・安く・安心して買える店

Specialty Camera Shop  
**アニアカメラ**

宍粟市山崎町東鹿沢26-3 本店 TEL(0790)62-2089  
咲ランド店 TEL(0790)63-0533

春 幸せへの旅立ちに——。

## ふじむら貸衣裳

宍粟市山崎町山崎181 TEL(0790) 62-0052

デンソー指定サービスステーション  
自動車電装品整備・携帯電話代理店

**カメウチ電器株式会社**

本社・工場 兵庫県宍粟市山崎町今宿 98-15  
TEL (0790) 62-1607(代)  
太子営業所・姫路営業所・神戸営業所・福崎店

宍粟市を舞台とした信頼と連携の「コミュニティ活動支援型地域SNS」サイト



「しそうの逸話」コミュニティ [http://shiso-sns.jp/community.php?bbs\\_id=56](http://shiso-sns.jp/community.php?bbs_id=56)  
「しそうの逸話」ムービーシアターコミュニティ [http://shiso-sns.jp/community.php?bbs\\_id=96](http://shiso-sns.jp/community.php?bbs_id=96)  
その他、宍粟地域の情報がいっぱいのコミュニティやブログなど

しそうSNS・

PoweredBy 宍粟市商工会 &しそう観光協会

<http://shiso-sns.jp>

用途に合わせて  
**にしん個人ローン**  
●住宅ローン ●フリーローン  
●マイカーローン ●カードローン  
●学資ローン

・豊かな老後生活のために  
・資産の効率運用に  
**にしん個人年金保険**  
●定額年金保険  
●変額年金保険



豊かな街づくりをお手伝いする

# 西兵庫信用金庫

<http://www.shinkin.co.jp/nisisin/>



一献献上 品質本位

まごころを伝えます。

T E L. 0790(62)1010  
F A X. 0790(62)6218



確かな品質と味わい。



SANYO HAI  
山陽盃酒造株式会社  
兵庫県宍粟市山崎町山崎 28

環境と家計にやさしい給湯器!



お車と住まいの快適、なんなりと

## ホンジョウ

(株)本條商店・ホンジョウプロパン(株)  
本社 宍粟市山崎町中井 96

●石油・タイヤ・自動車用品 ●ガス・水道・住設リフォーム  
☎0790-62-4321 ☎0790-63-1234

創業明治28年・さつき本舗

# 四季の菓子

御進物・おみやげ・お茶うけに、四季折々の  
真心こめた手づくりの御菓子を

本店：播州山崎町さつき通り（電）0790-62-0170

山田店：播州山崎町山田（電）0790-62-0160

福崎店：福崎町西田原 1177（電）0790-22-7555



パソコン・OA機器・事務用品・スチール家具  
各種修理・学校設備品・理化学機器

# イトーオフィスサービス 株式会社

山崎町中広瀬117-12 夢公園南隣 T E L (0790) 62-0126